

邪神の肉奴隷と化した聖女の物語体験版

「……………神の使徒に選ばれし者は強き心の持ち主ではない。神の名の下に、平然と悪魔の所業を行なえる弱き心の持ち主こそが、神の使徒として相応しい存在である……………」

哲学者オブ・ラザ著「神の名の下に」より抜粋。

……………神話の時代が終わりを迎え、人間の時代が到来した。人々は古き闇の時代を忘却するために「神々」を奉ることに執着したが、数世紀の時を経て、本物の宗教はカビのごとく蔓延する多くの偽物の中に埋もれてやがて消えていった。

レリスト教の歴史は決して古くはない。むしろ宗教としては新しい部類に属する。しかしこの宗教は、やがて世界全土を覆い尽くすことになる。偽物であるにも関わらず。

レリスト教は、元々数多くある宗教のひとつに過ぎなかった。主な活動は貧困層に対する慈悲の施しと奉仕活動で、それらは彼らが掲げる「神」の名において行なわれていたが、初期のレリスト教は布教活動にあまり熱心ではなかったため、信者の数は活動開始から半世紀が経過しても一万人前後で推移したままであった。

転機が訪れたのは大陸暦一〇六七年のことである。様々な紆余曲折を経て、グアナという若者が新教主の座に就いたことで変革が訪れた。彼は清貧を忌避する俗物で、金と、女と、そして権力が大好きだった。彼が教主の座に就いたのも、自らの野望を叶えるためでしかなかった。

「ふふふふ。見ていろよ、俺は何もかも手に入れてやる。そして、新たな「神」としてこの地上に君臨してやるのだ！」

貧困の家に生まれたグアナは「持たざる者」だった。ゆえに、彼は全てを欲していた。まるで喉の渇きを癒すため、水を欲するかのごとく。

当時、大陸は、大小様々な勢力が混在する群雄割拠の時代であった。グアナは新興国家ガイゼリアに拠点を移すと、そこで異常なまでの熱心さで信者の獲得に熱を上げた。彼はここで、自分たちの神こそが唯一絶対の存在であり、その他の神は神ではなく悪魔であると吹いてまわった。

不幸なことに、グアナは非常に優秀で有能な人物だった。彼は金銭と人脈を巧みに利用し、信者の少女を次々と献上してガイゼリアの宮廷深くに入り込むと、発言権を得てその実力を発揮して見せた。ゼト川の治水対策工事をわずか半年で完了させ、隣国ファイゼルとの戦いでは敵軍の半分の兵力でファイゼル軍を壊滅せしめたのだ。この二つの功績は国王アゼルを喜ばせた。だが、グアナはこれを自らの功績とはせず、あくまでも自らが信奉する「神」の力によるものだとし、功績に対する報酬としてレリスト教をガイゼリアの国教とすることに成功した。

この頃、ガイゼリアには、レリスト教の他にも様々な宗教が存在していたが、レリスト教が国教の認定を受けた後、それらは全て「邪教」と認定され弾圧された。焚書がおこなわれ、数多くの像が打ち砕かれた。逆らう者には容赦なく刃が振り下ろされ、数百人が虐殺された。その中には幼い子どもや生まれたばかりの赤ん坊が含まれており、非難の声が上がったが、グアナは気にも止めなかった。彼は麻薬を混入させた飲食物を国王に勧めると、その耳元で毒を吐いた。

「陛下、神はいま嘆いておいです。この地上に正しくない宗教が蔓延し、悪魔たちがのさばっていることを悲しんでおられます。陛下は神の使徒として、いまのこの状況を正さねばなりません。邪教を信奉する悪の国を打倒し、正義を敷くのです。神の名の下に」

「神の……名の、下に……」

「そうです。神の名の下に！」

グアナはほくそ笑んだ。

それからしばらく後、ガイゼリアは聖戦を開始する。聖戦の指揮はグアナがとった。彼は兵を集め、訓練を施して編成し、武器を量産させ、糧食を集

め、資金を調達した。そして戦場では最前線に立って指揮を取り、多種多様な戦略と戦術を駆使して次々と勝利を収めていった。

グアナの活躍によって一国、また一国と国が落とされ、聖戦開始から一〇年後、ガイゼリアはついに文明世界の全てを飲み込んで、史上最大の版図を誇る超大国となった。それは大陸暦一〇九九年のことで、国王アゼルは自らを「大王」と称してこの超大国の初代国王に就任した。

就任した大王が最初におこなったことは、建国最大の功労者であるグアナの国葬であった。グアナは超大国が完成する直前、肺炎を患って床に伏せ、そのまま回復することなく瞼を閉じていたのである。一〇年間、休む間もなく戦い続けた結果であった。

彼の最後の言葉は、

「神よ……おお神よ！ いま……いま、あなたの御元へ参ります……」であった。

一〇年間、ずっと「神の名の下に」と繰り返していた彼は、その言葉で自らを洗脳してしまい、当初は信じていなかった神を信じるようになっていたのだった。

グアナが死に、それからしばらくしてアゼル一世も死んだ。

しかし、聖戦はそこで終わらなかった。

レリスト教による宗教支配を徹底するために、他宗教の弾圧が開始されたのだ。それはガイゼリア全土に流血をもたらす惨事となり、後の世ではその時代をこう呼ぶことになる。

「暗黒の時代」
と。

＊

ガイゼリアが世界制覇を成し遂げてから半世紀。これに伴い、いまや世界唯一無二の宗教と化したレリスト教は、この間に強固な宗教的基盤を構築し、

その支配を強めていた。他宗教に対する弾圧がおこなわれ、レリスト教以外の宗教はすべて邪教とされた。

弾圧の最先鋒に立って活動しているのが「神罰執行隊」であった。この部隊は「神の名の下に」あらゆる残虐非道な行為をおこなうことを許された部隊であり、レリスト教の総本山である教皇庁の後ろ盾のもと、ガイゼリア国内で人の形をした災害として猛威をふるっていた。

神罰執行隊の蛮行は、後世の歴史家たちが顔をしかめるほど酷い。密告や告発があれば確かな証拠もなしに対象者を邪教徒として捕まえ、拷問によって自白を引き出すと、見せしめとして様々な方法を用いて処刑するのである。邪教徒と疑われた者は、よほどのことがない限り無実となることはなかったから、捕まった時点で事実上の死刑宣告を受けたに等しかった。

その中でも特に苛烈な弾圧を加えることで有名だったのがエヴァ・サーリ―という若い神罰執行官であった。

エヴァは年齢が一八歳の若い娘で「絶世の美女」と称するに足る容姿の持ち主だった。顔立ちは卵型で頬には無駄な脂肪が一切付着しておらず、エメラルド色の瞳は大きく宝石のようであり、鼻はツンと高く、唇は花卉のように小さい。金糸のような黄金色の毛髪は豊かな量と長さを誇っており、腰の辺りまで伸びて束ねられていた。肌の色はまるで処女雪のように白く、手や足は象牙細工の人形のように細くしなやかであった。にもかかわらず、突き出た胸と尻は女性の平均的水準を大きく逸脱した豊かさを誇っており、そのアンバランスさが同性・異性を問わず感嘆の息を吐かせて止まなかった。下界に舞い降りた「美天使の現身」と称されることさえあった。

エヴァは大貴族サーリー家の令嬢だ。サーリー家はガイゼリア屈指の資産家で「望めば人の命を含めて全てを手に入れることができる」とさえ言われるほどの財力を誇っていたが、両親はエヴァに対して厳しい抑圧した教育を施し、レリスト教徒として模範的に振る舞うことを強要した。

五歳で洗礼を受けた後、エヴァは一切の肉食を禁じられた。レリスト教の聖典を毎日のように音読させられ、その生活は聖典の内容を完全に暗記する

まで続いた。一日三度の礼拝は必ずさせられ、どのような理由があってもレリスト教の祭典や祝典には出席することを強要された。一度、体調不良から高熱を発し、祭儀の場で倒れてしまったことがあったが、その時、両親は娘の体調を気遣うことなく激昂し、拷問器具を用いて彼女を激しく折檻した。泣き言や弱音を吐くことは許されず、もし少しでも涙を流す素振りを見せれば容赦なく鞭で打たれた。成長しても、異性と交わることは決して許されず、貞淑を貫くことを要求され、自慰行為すら背徳の極みとしてさせてもらえなかった。

両親は、事あるごとにエヴァに同じ言葉を繰り返し言い聞かせた。

「弱者には慈悲を、貧者には施しを、そして邪教徒には断罪を！ 全ては神の名の下に！」

そのような経緯もあってか、神罰執行官に命じられた後の彼女の活躍は実に目覚しかった。まるで邪教徒を殺戮するためだけに存在しているかのごとく、顔に嬉々とした笑みを浮かべて邪教徒（と見なされる者たち）を捕らえ、虐殺してまわったのである。

エヴァは趣向を凝らした処刑を好んだ。邪教徒がなるべく長く苦しんで死ぬよう、先端が丸みを帯びた杭を使つての串刺し、煙りを出さない方法での火炙り、口元に小さな空間を作つてからの生き埋め、歯が錆ついたノコギリを用いての斬首等々の残酷な方法を用いてエヴァは邪教徒に対して神罰を執行していった。

彼女に捕縛された邪教徒の中には、まだ拷問を受けていないにも関わらず、先に捕まった者たちの死に様を見て泣きながら悔い改めることを申し出た者や、自ら率先して拷問を受けることで幼い子どもだけは助けて欲しいと嘆願する者もいたが、エヴァは彼らを決して許さなかった。

「全ては神の名の下に！」

顔に美笑を浮かべながらそう繰り返し、エヴァは断罪の刃を振るって多くの邪教徒たちを血泥の海へと沈めていった。

神罰執行官に任命されてから二年の間に彼女が粛清した邪教徒の数は五

八〇〇人に昇り、その功績によってガイゼリア暦五八年、エヴァは史上最年少の若さで「聖女」の認定を受けた。エヴァが殺害した「邪教徒」の中には、かなりの数の冤罪者や無実の者が存在していたとされているが、そのことは問題にすらならなかった。むしろ話題になったのは祝典に登場したエヴァの美しさで、白銀の素材に金の紋様で彩られた甲冑をまとうて登場した彼女は、まさに「美天使の現身」と呼ぶにふさわしい造形美を醸しだしており、その姿に見惚れ、失神する者が相次いだとのことであった。

そんな彼女が教皇庁から新たな任務を言い渡されたのはガイエリア暦五八年九月のことである。教皇庁に告発があり、ガイゼリアの辺境・ラザ地方に位置するクレコール村で、住人たちが奉ることを禁じられている古の神を崇拜しているとの情報がもたらされたのだ。

教皇アフォエンス一世は、跪いて下命を待つエヴァに向かって、厳かな口調で命令を下した。

「エヴァ・サーリーよ、全知全能の神に代わってそなたに命じる。クレコール村に巢食う邪教徒たちを討ち滅ぼし、かの地に聖なる威光をもたらすのじや。邪なる者たちを駆逐し、正しき者たちによる秩序を回復させるのじゃ！」
「はッ。このエヴァ・サーリー、必ずや邪教徒どもを殲滅してご覧にいれます」

教皇から直接邪教徒討伐の命令を受けたエヴァは、すぐさま立ち上がって身を翻し、直属の兵ら一二〇名を率いてただちにクレコール村に向かって進発した。

……クレコール村は小さな村だ。人口は一五〇人ほどで、周辺を深い山々に囲まれている。近くの町からは徒歩で一日以上の距離があり、周辺の村々との定期的な交流は皆無に等しい。土が貧しいため山の斜面に作られた段々畑の実りは少なく、同じ理由から山の恵みからも見放されていた。唯一、村の近くを流れる川では砂金が採れるため、村人たちはそれを売って生活必

需品の購入に充てていたが、川が氷結する冬場はそれさえも不可能になるため、冬場には餓死者や凍死者が出ることも珍しくなかった。

本来であれば教皇庁から「施し」を受ける対象に認定されてもおかしくない貧しさだが、クレコール村からはこれまでに「施し」の申請がされた形跡はなく、むしろ「施し」を受けることを忌避している様子さえあった。

クレコール村に到着したエヴァの行動は迅速を極めた。すぐさま兵を展開して村を包囲すると、村人たちの制止の声を無視して家々の中を強制捜査して回ったのである。すると、出るわ出るわ。まるで財宝秘宝のように家々から邪教の経典や祭具、呪物や呪布、怪しげな道具の数々が押収されたのである。そして村長の家からは、醜悪で不定形な姿をした邪神の彫像と、奇々怪々な文字と紋様が地面に刻まれた祭場が発見された。エヴァの美しい顔に亀裂のような笑みが浮かんだのはこの時であった。

兵士たちに追い立てられる形で広場に集められた住人たちは、エヴァたち神罰執行隊を前にして、必死になって弁明と弁解の言葉を繰り返した。

「ゆ、許してください……どうか見逃してください……」

「これには理由がありまして……」

「信じてもらえないかも知れませんが……この村には、かつてこの地一帯で猛威を振るっていた邪悪な神が封じられているのです……」

「我らはその神を封じた封印の民の末裔で、もし我らの祈りが途絶えれば、封印が破れ、邪悪な神が再び地上に出てきてしまうでしょう……」

「そうになったら地獄です。ですか、どうか——」

しかし、エヴァは彼らの弁明を聞き入れなかった。その美しい顔に見た者を戦慄させる鋭い笑みを浮かべ、高ぶる感情で頬を紅く染めながら、慈悲を求めるクレコール村の住人たちに向かって断罪の言葉を放ったのである。

「ならぬ！ おまえたちは真の神に背き、邪神を崇拜した大逆人だ。その罪は万死に値する！ よって、執行官の権限においておまえたち全員に拷問による死を命じる！」

裁判もなく判決が下されて、村人たちの間から悲鳴が上がった。

「そ、そんな……！」

「我々は決して神に背いた訳ではありません！　これは仕方のないことなんです！」

「そ、それに、邪神を崇拝したわけではありません。むしろその逆で――」

「お慈悲を……どうかお慈悲を……！」

「慈悲はないわ！」

エヴァは村人たちの嘆願を意に返さなかった。

「おまえたちは全知全能の神に逆らって邪な神を祭っていた。その罪は万死に値する。よって、神罰執行官の権限において、おまえたちに拷問による死を与える。覚悟せよ！」

かくして、クレコール村の住人たちに地獄がもたらされた。

エヴァに率いられた一二〇名の兵士たちは、拷問と殺戮の玄人集団だった。彼らは自分たちを率いるエヴァに心酔するあまり、彼女が喜ぶよう、身の毛もよだつような方法でクレコール村の住人たちを戮り殺しにした。

まず、親の目の前で、子どもが生きたまま目を刮り貫かれ、舌をペンチで引き抜かれた後、首を刎ねられて殺害された。子どもの死を見て嘆き悲しみ、エヴァたち神罰執行隊を悪魔だと罵った親たちは、ノコギリを使ってゆっくりと時間をかけて身体を切断された。若い男性は不純の象徴であるペ〇スを切り取られた後、睾丸をペンチで潰され、苦悶にのたうつ姿を笑われた後、斧で頭を割られた。若い女性は苦痛の洋梨という拷問器具で女性の大切な部分をズタズタにされた後、その中に杭を打ち込まれて串刺しにされた。臍を拡張され、子宮の中に大量の石ころを詰め込まれた後、ボテ腹となった腹を何度も何度も殴られて殺された女性もいる。他にも自分で掘った穴に生き埋めにされた者、縛られた状態で火を点けられた者、口から溶けた銀を流し込まれた者などがいたが、もつとも悲惨な死を遂げたのは邪教徒の首魁と目された村長の孫娘であった。

孫娘は衣服を剥がされて全裸にされた後、四肢を切断された。孫娘は両手両足を失った悲しみと、激しい痛みへのうち苦しみを味わったが、連れてこ

られた動物を見て顔を真つ青に染めた。

彼女の前に連れて来られたその動物は、巨大な雄豚であった。そしてその雄豚は、ドリル状のペ〇スを激しく勃起させていた。

「ひいひいひいひいひいひいッ！ 慈悲をッ、お慈悲をおおおおとおおおッ！」

これから何をされるのかを悟った孫娘は、まるでイモ虫のように身体を這わせながら慈悲を懇願したが、邪悪な笑みを浮かべる神罰執行隊の兵士たちには無駄な懇願だった。

孫娘は雄豚にあてがわれ、そのドリル状のペ〇スを雌穴へとねじ込まれた。

この際、膣穴から血が流れなかったことがエヴァの逆鱗に触れた。

「この幼さで非処女とは……！　やはり邪教の徒、淫らで不埒な奴め。その不純に相応しい罰をくれてやる！　豚に興奮剤を投与せよッ！」

巨大な注射器でもって、薄い赤色の液体が雄豚に投与された。

その瞬間、豚の目が血走ったかと思うと、顔の表面に無数の血管が浮き上がり、口から涎をダラダラと垂らしたのだ。

「ブヒッ、ブヒッ、ブヒイイイイイイイイイイイイイイイッ！」

豚の雄叫びが上がって、見るも悲惨な性行為が開始された。

「ひぎやあああああああああああああああああああああ
ツツ！」

孫娘の口から凄まじい絶叫がほとばしった。豚が激しく腰を振り、孫娘を犯す。そのつど、孫娘の腹の形が挿入された。ペ○ス状に浮き上がり、膣穴の連結部分からドバドバと淫ら汁が辺りに飛び散った。その様を、神罰執行隊の兵士たちはゲラゲラと笑いながら見物し、エヴァは自分の胸と股間をまさぐりながら恍惚とした表情を浮かべていた。

「ぎやはあああああああッ！ たすけてええええええええええッ、ぬいてええええええええええッ、ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ、ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ！」

孫娘な泣き叫びながら助けを求めたが、周囲から聞こえてくるのはガラガラという下品な笑い声だけで、救いの手は決して差し伸べられなかった。

やがて、幾度とない激しい腰振りの末、絶頂に達した雄豚が、ビクビクと身体を震わせて挿入しているペ○スの先端から精を放った。

[illegible]

豚の睾丸は人間の何十倍もの大きさがあり、従つて射精量も人間の比ではない。しかもドリル状のペ〇スは先端が孫娘の子宮の中にまで挿入されており、大量に放たれた精液によつて孫娘の腹はたちまち妊婦のようなポテ腹と化した。

[illegible]

孫娘のまだ未成熟な小さな子宮は、雄豚の大量射精に耐えられなかったようである。大量の精液によって膨張した子宮はほどなくして限界に到達し、孫娘の体内で弾けたのだ。それと同時に、孫娘の命も灯火が消え、目から光が失われた。

クレコール村の虐殺のフィナーレは、邪教徒たちの頭目である村長の死でもって幕を閉じた。村長は、自分の四肢が縄で括られても抵抗しなかった。すでに家族や村人、そして最愛の孫娘の悲惨な最期を見届けた彼である。その態度は、実に堂々としたものであった。

エヴァが見下す態度で村長を見た。

「邪教徒の頭目よ。偉大なる神の慈悲として、最後の言葉を言わせてやろう。もし何か言いたいことがあるのなら述べるがよい」

エヴァは村長が涙を流しながら慈悲を乞う姿を期待していたかもしれない。

しかし、村長はため息混じりに小さく呟いただけであつた。「すぐにわかる」と。

エヴァの合図が下り、四頭の馬がそれぞれの方角へと走った。肉が千切れ、骨が碎ける音がして、小さな悲鳴が聞こえた後、永遠の静寂が訪れた。

その後、クレコール村には火が放たれ、邪教の祭具や神具は全てその火の中にくべられた。特に村長の家は念入りに焼かれ、邪神の象は打ち碎かれ、地面に刻まれた紋様はズタズタにされた。

「これでよい。これでまた、神の威光が守られた」

燃え盛るクレコール村を見やってから、胸の前で十字を切り、エヴァは満足気に頷いたが、異変が生じたのはこの直後であった……。

………続きは本編でお愉しみてください。